

ニッポナリアと対外交渉史料の魅力 (22)



"The arctic voyages of Adolf Erik Nordenskiöld,
1858-1879" London, 1879.

"Vegas färd kring Asien och Europa"
2 vols. Stockholm, 1880.

"Catalogue de la bibliothèque japonaise
de Nordenskiöld" Paris, 1883.

ノルデンショルド関係図書（本学図書館所蔵）

ことになります。翌1879年の7月になって漸く脱出に成功し、ついに念願の太平洋へ姿を現したのです。

その後、ヴェガ号は調査を続けながら太平洋を南下して、同年（邦暦では明治十二年）9月2日に横浜港へ寄港しました。ノルデンショルドはこの地からストックホルムへ航海の成功を打電し、安否を気遣っていた国王オスカル二世や後援者たちは大変喜んでそうです。

日本でも東京地学協会がイギリスやドイツのアジア協会と共催する歓迎会が開かれ、皇族や政治家、さらには外交官たちが一行を労いました。また、明治天皇にも拝謁が許されるなど、その業績は大きく称えられました。この動きによって、二年前の西南戦争の痛手から立ち上がり、本格的な近代化を目指していた日本が、新航路で国益を追及しようとしていた姿が見えてきます。

歓迎行事が終わると乗組員たちは、鎌倉や草津など関東一円でまだ江戸時代の風情が残る異国情緒を楽しみます。そして、ヴェガ号の修理が終わると神戸に向かい、京都や滋賀を訪れます。次いで入港した長崎ではスウェーデン人でオランダ商館の医師として江戸時代中期に来日し、博物学分野から日本研究を進めたカール・ツェンベリー⁽³⁾の記念碑を訪れるなどして日本を去りました。

その後、ヴェガ号は東南アジアからインド洋に入り、スエズ運河を通過して1880年4月にストックホルムに帰港しました。この遠征の経緯と内容は、帰国直後に刊行した“Vegas färd kring Asien och Europa”（写真・中央）で報告し、これが英語などの言語で出版されたことによって、世界へ向けた発信となりました。

■「豊かな実り」としての日本の書物

ノルデンショルドは日本滞在中に、後世の日

本研究に役立てようと、横浜在住のオランダ人から紹介された日本人青年の助けを借りて、横浜や東京、さらには京都で大量の日本の書物を購入していました。大事業をやり遂げた彼にとって、これこそが計画書に記載していた「苦勞に報いるに足りる豊かな実り」だったのではないのでしょうか。

帰国後、これらの書物はストックホルム王立図書館に寄贈されましたが、その内容は多くが江戸時代の刊行物で占められています。分野は現在の科学名称でいう、哲学、宗教、地理、歴史、産業、心理学、芸術などに及ぶ1,036点で、冊数は約7,000冊にも成るといいます。このコレクションを構成面から見ると、収集点数と比較して分野の広さが目立つことから、全体として散漫な感じは否定できません。しかし、各分野共に江戸時代に刊行されたものが多く、今とっては日本国内でも入手することが難しい書物のコレクションであります。

また、ノルデンショルドはこのコレクションの整理をヨーロッパ在住の日本人に任せましたが満足に捗らず、当時のフランスにおける最大の日本学者と目されたレオン・ド・ロニー⁽⁴⁾に依頼します。ロニーからすれば、ヨーロッパで和綴じの書物が少なかったこの時代に、それを求めていた自分の関心と合致したのです。その結果、ノルデンショルドが日本から帰って三年後の1883年にパリで漢字を交えた冊子体の目録“Catalogue de la bibliothèque japonaise de Nordenskiöld”（写真・右）が刊行され、このコレクションが日本の伝統文化の一端として、当時のヨーロッパで流行していたジャポニズムの高揚にも貢献することになりました。

■「北盾文庫」の栄光の歴史が蘇る

我が国のノルデンショルドの研究者に、この